

# 伊藤外科ニュース



## 105号

2013.04 発行

皆さん今年の桜の鑑賞はいかがでしたか？

私は、昼間の桜を見る機会がなく寂しい思いをしていましたが、雨予報の日曜日に天気予報が外れたおかげで府中のゴルフ場で素晴らしい花見ができました。また夜桜見物に千鳥ヶ淵にも行くことができました。

今年の桜は開花後の天候が悪かった事もあってか淡い花でしたね。今後は都内の八重桜と5月の連休の山桜見物を楽しみにしています。

以前も話題にしましたが、新宿は街医者にとっても勉強する事が便利な環境です。特に、診療に直ちに役立つ素晴らしい講演を聴く機会に恵まれています。

講演の内容は勿論興味深いのですが、私は演者の先生の人柄や職場環境に興味を強く持ちます。医師の技量や個性は職歴に大きく左右されるので、演者の雰囲気から働いている環境を想像して楽しみながら貴重な講演を拝聴させていただきます。

さて、私が生まれ育った淀橋は大きく変わってしまいました。更に再開発と称する町の破壊が進んでいます。

今までは、おじいさん、おばあさんから孫まで顔見知りの家族が多く淀橋にも住んでいました。しかし、最近は家族ごと、または、お年寄りが一人で転居を余儀なくされています。淀橋や十二社の地名が無くなってから、近隣地域は活力がなくなったように思っています。地域の伝統文化を大事にしながら過ごすように気にかけている今日この頃です。

街医者の仕事に往診があります。

今では、ご自宅で最期を迎える御老人は少なくなりましたが、それでも年に数名の方の臨終に立ち会います。自宅で最期を迎えられるにはご家族の理解と協力が不可欠で、医療者の仕事の多くは家族の不安を軽減し、慰労する事と考えています。そして、ご臨終に立ち会った様々な患者さんの顔や声は私にとっても忘れがたいものです。

厚生省は在宅医療を医療経済的な側面から強く推進しようとしています。家族の苦労の多さや街医者の助力を理解しているのかフツと不安になります。

昨日義父の墓参りの帰りに、鎌倉へ足を運びました。この地へは小学校の遠足以来でしたので、鶴岡八幡宮参拝と小町通りの散策をしてきました。天候も良く、ゆっくりと散歩を楽しめました。

外国、特に欧州からの観光客が多かったように思いましたが、皆さん楽しそうでした。改めて日本史を理解していない自分に気付き、休日には日本の歴史を勉強する心の余裕が必要だなと思いつつ帰宅した一日でした。

4月の中旬からは、やっと天候も安定し暖かい日が続く天気予報ですね。皆さんも健康で楽しい日々、休日を過ごしてください。



伊藤外科 HP <http://www11.ocn.ne.jp/~itoh-hp>

(バックナンバーは HP にて公開中です)



## 三弓先生の本棚 31

# 人間の基本

著者：曾野綾子

このところ、本の購入はすっかりインターネットに頼っているが、先日、久しぶりに書店をぶらぶらした。新書の棚でフッと目にとまったのが曾野綾子氏の新潮新書『人間の基本』である。目をひいたのは著者名でもタイトルでもなく、帯のキャッチ「足場のない人は人生を無駄にする」だった。帯を見て本を買うというのは、やはりインターネットの本屋さんではないことだもんなあ。

三弓の本棚にも曾野綾子氏の本が何冊かある。氏の著作について何度か感想を聞いたことがあるようにも思うのだが、敬虔なカトリック教徒で海外支援など社会的活動をしている作家という認識以外、取り立てて興味を持っていなかったのので、聞き逃した。うっすら思い出すに、好意的というのとはちょっと違う印象のようだったが、それでも蔵書に本を残していたということは、なにがしか氏の考えに共感する部分もあったのだろう。

曾野綾子氏は昭和六年生まれである。気をつけて書店の棚を見てみると、「言い残しておきたいこと」とでもいうように、このところたくさん、今回手にしたものと同じような内容の本が出版されている。大正十二年生まれの作家・佐藤愛子氏も同様に（タイプはまったく違うが）、戦前生まれの女性作家たちがさかんに今の世に物申されている姿は、私としては興味深い。

『人間の基本』の頁をめくっていくと、「知恵」「教養」「肝の据わり方」などなど、近年では死語になりつつある言葉が多く出てくる。実は最近、21世紀に入って死語になった（なりつつある）言葉を手帖にメモしている。若い世代がその言葉を知らないわけではないのだろうが、言葉は遣わなければ、それが示す意味も含めて人間社会から無くなっていく。「愛嬌」なんていうのもそのうちのひとつかもしれないなあ。

本書は曾野綾子氏が書いたというより、語ったことをまとめた本のようなものである。噂には聞いていたが、まさに「歯に衣着せぬ」語り口である。逆をいえば、「人になんとわれようが、思っていることはきっちり言わせてもらおう」と実に腹が据わっていらっしやる。「いくら偏差値が高くても、頭でっかちで人間にとって根本的な部分を欠いた人間は、社会にとってむしろ有害」、無駄に親切すぎる昨今の情報発信について「こうした日本特有の現象は、想像力が欠如した人向きではあっても、人間性に対する一種の屈辱であると同時に、日本人がそういう教育を受けてきた結果でもある」、「悪い状況、もっと言えば修羅場を経験する意味というのは、肉体や筋肉と同じように精神に負荷をかけること。そうでないと、人間として使いものになる強靭さが備わらない」……。年齢よりババ臭いといわれるワタクシとしては、合点がいくことも多い。

曾野綾子氏は「終戦の年に中学二年生で、戦後社会で人間形成された部分が多い」と書いている。ただし、カトリックの学校であったゆえに「幸いにして戦後教育の誤りにも毒されませんでした」とも。戦後、日本は教育・人間形成においてどんな舵を取ったのか、今一度見直す必要があるのかもしれない。